

～ 共に歩んだ日本の皆さんからのメッセージ ～

TAAAのスタッフ、会員（アイウエオ順）

浅見 克則（会長）



浅見さん（右から2番目）

野田前代表の活動を手伝い始めて早30数年の月日が流れた。就職から退職までの長さだ。高校に不要になった英語の教材を買いに行ったり（女子高に初めて潜入した）、収集先を拡げてインターナショナルスクール、アメリカンスクール、大使館と日頃縁遠い場所にも仕事の合間を縫って出掛けた。総体にキリスト

教文化圏の人々はボランティア精神に富んでいて先々の収集先で何時も大勢の生徒さんや先生が助けてくれる。或るインターナショナルではいつも校長先生まで上着を脱いで本を運んでくれた。玄関上に『SELEFS ACRIFFICE』と掲げてある看板に偽りはないなと感心した。

或る時、排ガス規制で図書館車が大量に廃車されるのでは？ と思い至った時、時を移さず野田代表が南アから戻って現地の組織 MEI のベントレイ代表から図書館車を造る構想を聞いた。用廃の図書館車を寄贈するアイデアがこの時2人の間で生まれた。埼玉県内の図書館車の配置状況、廃車予定の一覧を浦和市の社会教育部長から手に入れたがこの方がなんと野田代表と私の共通の知人でありその後多くの車の一時保管や大量の本の保管にも協力をお願いした。結局28台の車が海を渡った。その中の一台には図書祭りに展示した際にマンデラ大統領が訪れ乗車した記録もある。

私の得意分野は運転に尽きる。本の輸送、車の輸送その他諸々の物資の輸送でこの会に貢献できたと自負している。

大友 深雪（図書事業担当）

〈TAAA を通しての南アとの「再会」が気づかせてくれた「図書活動」の重要性〉

たまたまの出あいによって開かれた世界に、いつの間にか引き込まれていく—そんなことが自分に起こるとは思いもしなかった40代までの「前半生」を終えた1989年、たまたま通訳を頼まれて出かけていった反アパルトヘイト集会在私を初めて南アと出あわせてくれました。

ANC 東京事務所の提起・要請を受けて Black Education Empowerment を支援する団体の一つの立ち上げに参加し、奨学金や学校施設建設資金の送金を2013年まで続けました。1990年代に始まったいくつかの団体の支援活動が2000年代には次々と消滅して行く中、日本で使用済みとなった移動図書館

車と英文古本の輸送を手がけた TAAA の「図書活動」だけが、持続・発展していくことに、強く心ひかれました。消滅していった原因には、支援対象選定に問題があったのかもしれませんが、TAAA の「図書活動」の支援対象は、新生南アのエリート層ではなく、新生教育省からもかまわれていなかった黒人居住区や農村部の子どもたちでした。

埼玉での TAAA の活動も、会員制ではなく、活動の日時だけ広報され、「参加・不参加は自由、来る人は拒まず、誰でも直ぐ作業に参加できる。作業場での作業とは、アメリカンスクールなど日本国内から送られてきた英文古本の梱包をほだき、種分けして（就学

前、小学校低学年、高学年、中学校・高校、専門学校、その他向けなど)、南ア用に梱包し直し、相当量たまったら南アへの発送にむけた準備をする」という開放的な運営で支えられていたので、2013年から気楽に参加させていただきました。ところがこの「図書活動」が学校図書室の整備・拡充が地域の教育・コミュニティ作りにとっていかに重要かという気づきを促し、私を南アと「再会」させたのです。

荷作り用品購入・輸送費にあてるために、カンパ・寄付は募っていましたが、送る本、算数セット、サッカーボールなどはすべてリサイクル品で、そういう社会的課題への対応も考えている運動だったこともあって、南ア現地視察訪問にも加わったりしながら、毎月平塚から埼玉まで通いました。



大友さん（前列中央）

この TAAA の活動を通しての南アとの再会・図書活動の意義を噛みしめながら、日本全国で進行中の図書館の統廃合・図書司書の外部委託などを、私の住む地域でも阻止しなくてはと焦っているところです。

北爪 建一

〈元図書館員として〉

私が埼玉県立図書館の職を得たのは1975年であり、入職から移動図書館の担当となり週2・3日は乗務した。職員の内、最も長く移動図書館を担当し、県立移動図書館の終焉まで経験した。

戦後、我が国は図書館の無い自治体も多く、学校図書室に至っては物置同然とも言えた時代が続いた。埼玉の移動図書館の始まりは1949年で、60年代県立図書館では5台の移動図書館を走らせた。巡回自治体は町村が多く、主に公民館や小学校を駐車場とした。巡回周期は40日前後で特に小学校の巡回時間帯は



休みや放課後30分～1時間位を充てた。貸し出しの状況としては「自由南アフリカの声」に掲載されているような賑わいだったが短時間の中、児童一人ずつの対応は不可能でありクラス単位だった。

TAAA は移動図書館の巡回から

常設の学校図書館・図書室の振興に力を注いだ。児童・生徒の立場から捉えれば年に数回の巡回より、いつでも利用可能な固定施設の方が便利と言える。我が国も「学校図書館法」の整備（1953年制定）により次第に学校図書室は充実し、それに呼応する現象として学校への巡回は激減し、都道府県図書館では皆無となった。

「自由南アフリカの声」に現地報告として平林さんが毎号克明なレポートを送ってくれている。最新号「No.81」には2023年2月『司書教師へのアンケート回答一覧』を寄せた。辛辣な案件で“州教育省からサポートを受けているか否か”の設問に「ない」の回答が多く見られた。TAAA からのサポート終了後は、図書の供給が重要な課題となろう。我が国では“学校図書館法”が規定されていて、児童・生徒数に従い国が図書費を助成している。アンケート項目“22年4月以降図書室に変化・問題”には、司書教諭の熱心に拠る成果が垣間見ることができる。そこには学校格差が生じる事も否めない。TAAA が関与した学校図書館は多くの成果を上げ羨望されるが、今後現地では格差解消を目指し地域の学校を統括する州教育省へのロビー活動が必要となる。（言うは易し）

この拙文を書き始めた今、第79回【読書週間】最中で10月27日から11月9日迄、国民的行事として各地でイベントが開催されている。読書が思想ではなく生活そのものであることを語り実践している平林さんへエールを送る。

小泉 信一郎

TAAA 会員の小泉信一郎と申します。現在は、成蹊大学法学部に在学し、イタリアの大学に留学中です。

TAAA では、中高生の時に多くの活動に参加し、普段の活動や報告会等に参加させていただきました。高校1年次には、南アフリカに1か月滞在し、そこで経験の会誌に寄稿致しました。

TAAA の皆様は、知識がなくても、なかなか活動に参加できなくても、いつも暖かく受け入れてくださいました。大学のゼミの先生から、「小泉さんの長所は、何事にも興味を持ち、問題と向き合おうとするところだ」と仰っていただいたことがあったのですが、こうした姿勢は、互いの個性を尊重し、楽しく活動することをなによりも大切にする皆様の影響が大きかったのではないかと考えています。英語の成績も特別良くなかったのですが、それでも外国語や国際系の分野や交流に興味を持てたのも、TAAA のお陰だと感じています。TAAA の皆様のように、他者を尊重し、自分たちのペースで着実に歩を進めていく姿勢



小泉さん（左）

は、今でも参考にしています。

活動や報告会では、会長の浅見さん、代表の久我さんをはじめ、様々な方々にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。活動に携わることができ、とても嬉しかったです。楽しい時間をありがとうございました。

下谷 房道（副代表）

「南アフリカ」というと何か忘れ物を残してきたような思いになる。大学時代に大教室のかなたでこやかに講義を進める楠原彰先生の姿が思い起こされる。そこで耳にしたアパルトヘイトの実態。これはおかしいとまっすぐに感じた。

就職してから TAAA に出会い（1992年、会が発足する前だったが）、その活動の中でアパルトヘイトに反対する多くの人々に出会うことができた。1994年には南アフリカに訪問できた。会の送った英語の本を大事に抱えて学校に持って行く先生の姿は今でも目に焼き付いている。本当にアパルトヘイトが終焉し、マンデラが大統領になるとは思ってもみないことだった。またマンデラの示した赦しの姿勢には驚嘆するばかり。会の活動に参加することで視野が広がり、世の中の見方を学ぶことにもなった。本当にいろいろな方にお世話になった。改めて感謝の意を表したい。このところ病気を患ったり、周辺にも変化が生じて、活動に参加できていない。送られてくる会報をめ



くっては、丁寧な草の根援助の継続に「すごさ」を感じてきた。

会がなくなるといって少なからずあわてた。アパルトヘイトに憤慨したあのころからの時の流れを自分も総括しないとならないのだろう。同時に会のレガシーが引き継がれていくことを祈りたい。

（最初のころ会報は職場の印刷機で印刷していました。もはや時効と思うのでここに告白します。）

高野 千恵美 (経理担当)

〈TAAA に感謝と希望を〉



高野さん (前列左) 茂住さん (後列右)
石巻市 被災者支援にて

14、5年前になるでしょうか。当時 TAAA の代表を務めていらした野田さんと知り合い、月に一度の作業に参加するようになりました。英語本を箱詰めする作業場が自宅近くでしたので、気軽に参加する事が

でき長く続けてこられたのではないかと思います。

参加者の皆さんはそれぞれ、南アフリカのアパルトヘイトをきっかけとした関心等やボランティアへの何か志しをもって参加されていましたが、どちらかというとは私日々の暮らしの中で誰かの為になる事が出来ればという気持ちで参加していました。

月に一度でしたが、それこそ老若男女が集い、日頃接点はないであろう方々と一緒に様々な話をしながら楽しく作業の時間を持てたことに感謝しています。

TAAA での通常の作業の他に国際協力イベントへの参加や、東日本大震災が発生した時には街頭募金や物資の収集、そして宮城・福島へ行き震災の被害の大きさに衝撃を受けました。

英語の本を手にとった南アの子どもたちに会いに行く機会はありませんでしたが、これからの人生の中でいつか訪ねてみる事ができるかもしれません。TAAA の活動は終了しますがこれまで南アに蒔いてきた種が花を咲かせ、また次の未来への種となる事を願っています。

津山 直子

(NPO 法人アフリカ日本協議会副代表、明治学院大学国際平和研究所
研究員、元アフリカ民族会議 (ANC) 東京事務所コーディネーター
(1988~92年)、元日本国際ボランティアセンター (JVC) 南アフリカ
現地代表 (1993~2009年))

〈南アフリカの人々と共に歩んだ TAAA の31年〉

「アジア・アフリカと共に歩む会(TAAA)」が31年にわたる活動を終えて解散するにあたり、寂しさと同時にお祝いの気持ちが湧いてきます。それは、TAAA が南アフリカの人々と歩んで、築き上げてきた多くのことが、たくさんの活動地に残り、今後も成長していく、そんな将来に続く道を感じられるからだと思います。

50万冊の本は、本という種からさまざまな芽が成長し、学校やコミュニティ、アパルトヘイト後の南アフリカのさまざまな場で、しっかりと根を張りながら、多彩な形で活躍しています。学校で本を読む文化が生まれ、本を大事にして受け継いでいく司書や図書委員の働きはこれからも続き、また広がっていくでしょう。

TAAA が設立された1992年の頃、私も南アフリカの農村や「タウンシップ」と呼ばれる都市の黒人居住区を回りながら、アパルトヘイトが残した教育の格

差に呆然とする毎日でした。数キロ、数十キロしか離れていないのに、全く別の世界があり、立派な校舎で教育環境が万全な学校がある一方で、机や椅子も足りず本もない学校がある。そして後者が圧倒的に多い。アパルトヘイト体制は、劣等な教育にしておけば、人口の多数がその能力を伸ばせず、抑圧し続けることができると考えていたのでしょう。本を読ませないことは、外の広い世界を知る機会も与えないことでもあります。

しかし、一冊の本をボロボロになるまで回し読んだり、差別的な教育に中高生が立ち上がり、数千人もが命を落とした中でのうねりが、アパルトヘイトを撤廃する大きな力になりました。

来日した反アパルトヘイト運動のリーダーだったユニス コマネさんが、本を送ってほしいと頼み、そのことが TAAA の設立につながったのですが、ユニスさんの願いは、本が広い世界に窓を開き、アパルト

ヘイトの教育では得られない思想や知識の源になる、という強い思いがあったのでしょうか。でも、それに答えた TAAA の長い道と、50万冊の本や各地の学校の図書室、そこから生まれた南アフリカと日本のきずなは、ユニスさんの期待や想像をはるかに超えるものになったでしょう。天国のユニスさんは周りの人に自慢しながら、きっと見守ってくれていることと思います。

「アパルトヘイト後の南アフリカの教育の立て直しを日本の市民も応援していきたい」という思いがきっかけ、TAAA が残してきたものは、市民による国際

協力の象徴のようにも思います。市民が出会い、協力し合うなかで大事に育まれる。一人ひとりの命は限りあるものですが、大事に育まれたものは次へとつながっていきます。

TAAA の歴史を辿りながら、私の記憶に残る具体的なことを書こうと思っていたのですが、冒頭に書いたお祝いする気持ちを思っていたら、こんな文章になってしまいました。でも南アフリカの多くの人々やユニスさんも同じ気持ちかなと思いながら振り返りました。私も TAAA を通して多くの感動に出会えたことに心から感謝しています。

西村 裕子（データ管理・ぐりとぐら担当）

〈TAAA の思い出〉



TAAA の皆さま、長年に渡り変わらず、誠実さと温かみに溢れる活動で、南アフリカのたくさんの人達に寄り添って来られましたね。大変お疲れ様でございました。日本と南アで一生涯懸命に続けて来られ、ひとつひとつの場面で、たくさん

の思い出がありますね。以前は、毎月の作業の他に、フリマに参加したり、会報を自分たちで印刷して作ったり、国際交流のイベントに参加したりと、色々な体験をしました。年齢も職業も様々な方たちとお知り合い

になれ、平林さんが送って下さる写真で、南アの子どもの笑顔を見ることが出来ました。子どもたちの

笑顔は、いつ見てもキラキラと輝いていました。

21年前、図書館にある「ボランティアガイドブック」のような本を借りて、家から一番近かったボランティアグループを選んだことから始まり、TAAA の出来事は私の人生の中にとっても素敵な彩りを添えてくれました。ズルー語の入力に大苦戦して、「ぐりとぐら」に貼るシールを作ったことも、本当に楽しい時間でした。



たくさんの人達が参加して来たグループですね。皆さま、これからもどうぞお変わりなくお過ごしくださいませ。

牧野 久美子（日本貿易振興機構アジア経済研究所研究員）

2023年いっぱいでの TAAA の解散が決まったとのこと。いつかこの日が来るだろうとは思っていましたが、やはり寂しい気持ちでいっぱいです。30年余りの長きにわたり活動を続けてこられた皆様、本当に、本当にお疲れさまでした。

TAAA が発足した1992年は、南アフリカがアパルトヘイト体制から民主主義体制にまさに移行しようとしていた時期でした。新しい国づくりにおいては何よりも教育が重要なので力を貸してほしいという、当時はまだ解放運動組織であったアフリカ民族会議（ANC、現

在の南アフリカ政権与党）からのリクエストに基づき、TAAA の活動を始められたと伺っています。

私は2010年前後に2度ほど、南アフリカのクワズルー＝ナタール州で平林さんの学校訪問に同行し、TAAA の活動を見学する機会をいただきました。子どもたちが生き生きと図書活動や菜園活動に取り組む姿、そして平林さんが先生方に深く信頼されている様子が、いまでも強く印象に残っています。

TAAA の歴史は民主化後の南アフリカの歩みとともにあり、2024年で南アフリカの民主化からもちょ

うど30年になります。公教育の質や学校間格差、また若年失業率がきわめて高く、学校を卒業してもなかなか仕事がないなど、南アフリカの教育をめぐる課題はいまも山積しています。そのような状況にあっ

も、TAAA の活動に触れた子どもたちや地域の人たちは、TAAA が植えた自尊心の苗を、自らの力でますます大きく育ててくれるものと信じています。

丸岡 晶 (副代表)

私は現在、ビジネスパーソンとしては人事の領域を専門としておりますが、かつて社会貢献の業務をしていたことがあります。その際、個人的にも何か社会の役に立ちたいと思い、実家に近いTAAAの門をたたきました。公私ともに何かと忙しい時があり、十分に参加できないこともありましたが、いつも会の皆様があたたかく迎えてくれて、第三の場所として楽しく活動できました。1回だけ南アのプロジェク現場を訪問したことがありますが、日本から贈られたたくさんの本が確かに子どもたちに喜びをもたらしていることを実感できました。また、新型コロナウイルス禍で難し

くなってしまいましたが、毎年のように平林さんを囲んで行なった数々の報告会や懇親会が懐かしく思い出されます。今回、当会は発展的解消をすることになりますが、TAAAが南アに残した財産は末永く受け継がれていくと思います。一個人としても、南アをはじめ、国際協力の活動を細く長く続けていきたいと思っています。



森 直之 (サッカー担当)

私がTAAAの活動に参加したのは、2010年に南アフリカで開催されたサッカーワールドカップがきっかけでした。当時の私は、大学2年生テレビを見ていると偶然【南アフリカの表と裏】という番組を目にしました。表は、サッカースタジアムで盛り上がっている選手やサポーターの姿。裏は、ライフラインが整っていない地域で、素足の子どもたちがスーパーの袋を紐で結んで作ったボールでサッカーをしている姿でした。その時、私は同じ国なのにこれだけ貧富の差があるということにショックを受けました。

素足の子どもたちの足元にサッカーシューズを、そしてスーパーの袋を紐で結んだボールを本物のサッカーボールにしてあげたいと思い、南アフリカに繋がりがある団体を探していた所、TAAAに出会うことが出来ました。

それから13年間、大学の授業が終わった後も私はTAAAの活動に参加し、サッカープロジェクトに従事しました。(南アフリカには3度行きました) サッカープロジェクトを通じて、様々な方から2,300個を超えるサッカーボールの支援を頂きました。支援者

の皆様には、感謝いたします。

私がTAAAでの活動で学んだことは沢山あります。その中で自分が大事なな、と思ったのが【選択肢】です。TAAAの活動は、日本から英語の本を南アフリカの子どもたちに送る図書プロジェクトに始まり、2007年に菜園プロジェクト、そして、2011年にサッカープロジェクトと続いていきました。

プロジェクトが3つになったことにより、本を読むのが苦手な子どもたちが、菜園やサッカーに興味をもち、各分野で活躍する機会が増えました。またそれによって、元々本を読むのが苦手だった子どもたちも、菜園やサッカーに関連する本を読み始め、結果的に図書プロジェクトにも繋がり、良い循環になったと思います。



プロジェクトが増え選択肢が生まれて、埋もれていた才能が開花した子どもたちも多いと思います。そして参加した子どもたちは、活動を通して成長していきました。今はその子どもたちが大人になり、仕事について生活を営んでいます。

31年続いた TAAA の活動は解散を迎えます。31年前に支援していた子どもたちは、40歳を超えて南アフリカを担う大人になっています。これからは彼らに TAAA の活動を引き継いでもらい、より良い未

来を築いていってほしいと思っています。アパルトヘイト後の南アフリカの教育の立て直しを、日本の市民も応援したいという想いで結成された TAAA。その想いは、31年を経て概ね達成されたかと思います。

私は TAAA を通して様々な方と活動し、人間として成長できたと思っています。そして、この活動は私の人生の大きな1ページになりました。本当に TAAA と携われて良かったです。TAAA スタッフ、支援者の方、ありがとうございました。

茂住 衛

〈東日本大震災の被災地を訪問（2011年）〉

私が参加した（数少ない）TAAA の活動で、特に印象に残っているのは、2011年5月28～29日と7月9日の2回、この年の3月11日に起きた東日本大震災の被災地である石巻市と仙台市を訪れたことです。石巻では、津波で自宅が流された被災者数家族が同居している個人宅、保育所、雑貨店、スポーツ振興に取り組んでいる NPO の事務所、仙台ではホームレス支援の NPO の事務所などを訪問。被災者の皆さんのお話を聞き、支援のために集めた絵本、玩具、文具、サッカーボール、寄付金などを渡しました。5月の訪問では、石巻市に隣接する女川町にも行

きましたが、巨大津波による被害による痕跡はまだ生々しく、あちらこちらで流された乗用車やトラック、家屋、漁船などがそのまま残されていました。

支援対象地の人に事業のパートナーになってもらい、支援物資を集めて配布する、そして現地を訪れるという活動のあり方は、TAAA の南アフリカ事業で何度も繰り返し実践してきたことです。この経験を積んでいたもので、日本国内の地震・津波災害に対する緊急支援もスムーズに行えたのでしょうか。また、TAAA のウェブサイトの「活動日誌」には、この活動の報告も掲載されています。この報告から、当時の様子をリアルに振り返ることができ、その時々のお出来事を意識して記録しておくことが将来にもたらず意味を改めて実感しました。

米山 周作（監事）

〈生涯忘れられない20日間〉

大学の授業で、映画 Cry Freedom（邦題：「遠い夜明け」）を観たのが南アとの最初の出逢いでした。その後の米国留学で、アフリカの教育支援に携わって

いた先生から、南アの教育を取り巻く人種問題、貧富の格差、多言語社会、HIV の蔓延等、一国内に凝縮された世界の縮図を見せられ、いつの日か南アを訪れてみたいと強く思うようになりました。

高校教師となって多少余裕が出てきた2006年、TAAA のことを知り、当時は浦和に住んでいたこと



もあって、TAAAの国内活動拠点が与野だと知って縁以上のものを感じました。すぐに当時の代表の野田さんに連絡をして、平林さん始め多くの方々と知り合う機会をいただき、20日間でヨハネスブルク、ダーバン、ケープタウンの3都市の学校を巡る訪問が実現しました。移動図書館車に乗車しての学校巡回、ソウェトでの3泊4日のホームステイ、サッカー観戦、酒場体験、ダーバンでのサファリやサーフィン体験、結婚式参加、ケープタウンでの教育省訪問やロベン島・ベ

イエリア散策等、多くの南アの方々にも本当に良くしていただき、生涯忘れられない経験となりました。

人種や国籍を越えた多くの優しさに触れ、私自身の世界観も変わり、現在は多様性の重要性を高校生に伝えています。その原点がTAAAです。TAAAがその役割を終えたとしても、私の中にそのDNAは残っており、その理念を引き続き次世代に広めていくのが私の役割だと思っています。本当に有り難うございました。

横田 雅史 (認定NPO法人HANDS 代表理事)

最初にTAAAの活動に参加したのは2016年で、本の仕分けなどの作業を手伝いに行きました。その日は総勢10名ぐらいで作業をして、その後は幸運にも忘年会にも参加させてもらいました。その日集まっていたのは、いつも活動を中心的に支えている方たちに加え、学生や初めて参加した方もいて、とても賑やかで楽しい時間でした。また忘年会では平林さんから簡単な現地報告会もあり活動の様子が良く理解できました。

わたくしは普段は他団体(NPO法人HANDS)の代表として活動しており、その他の複数の団体にも役員や会員、ボランティアなど様々な形で関わっています。それぞれの団体にはいろいろな特徴があり、ま

た課題もあります。TAAAの場合は、小さな団体ではありますが、活動に初めて参加したときから、本当に多くの人に愛されていると感じていました。またもう一つ感じたことは、多くの協力者に支えられていることと関係があるかもしれませんが、とても堅実な運営をしていることで、学ぶべき点が多くあります。

解散という大きな決断に対しては、残念という気持ちをお持ちの方もいるのではと思いますが、しかしTAAAだからこそ最後まで協力したいと考え、そして実際に多くの方が協力されていると思っています。素晴らしい30年以上の活動と運営でした。皆さま、大変お疲れさまでした。

渡 恵美子 (ホームページ担当)

約10年間、TAAAホームページ更新のお手伝いをさせていただきました。2017年のホームページリニューアルでは、久我さんのアイデアを元にホームページを作成し、完成した時に大きな達成感があったことを思い出します。

私自身は東京の自宅を出ることなく作業していましたが、ホームページの原稿や写真を受け取った時、南アフリカの活動の空気、さいたまの活動の空気を感じ、南アフリカとさいたまが地元のように愛おしく感じました。これからも、その気持ちは変わらないと思います。TAAAの皆様、長年の活動お疲れ様でした。寂しい気持ちもありますが、TAAAで得た思いを大事に持ち続けようと思います。



いろいろな形でご支援くださった方々（アイウエオ順）

伊藤 宏

〈TAAA 閉会を知って〉

私が TAAA の名を知ったのは20年以上も前に、たまたま海外勤務中に買った英語書籍の有効利用と思い、寄付先をネット上で探していた時のことです。最初は英語書籍だけを送っていましたが、それも尽きる頃、Web ページで寄付も求めておられることを知り、それに同感して僅かばかりの寄付を始めたという経緯です。

いつも会報を拝見して、着実に南アフリカへの国際協力を進めておられることに感服していました。このたび閉会されることを知り、30年余の長きにわたる

ご活動に改めて敬意を表します。30年一昔と言いますが、このめまぐるしく変化する現代におきまして、30年余の期間は大変長い時間です。南アフリカで TAAA の活動を受けて育った現地の人々にとっても感慨深い期間だろうと察します。

私は現役時代の出張と、退職後の観光でいくつかの国を訪れましたが、南アフリカを始め、イスラエル、シリア、ロシアなどを新聞や TV の報道面で目にする都度、旅行で訪れた記憶が蘇り、現代は諸事多端で難しい時代になったものをつくづく思います。TAAA をはじめとする諸機関団体の今まで進めてこられた活動が、いつの日か世界平和に貢献するものと期待しています。

加藤 公満子

TAAA の本を読んで大人になった南アフリカの子どもたちは大人になってどんな生活をしているのでしょうか。

以前 NHKBS で南アフリカを走る特急列車の旅番組を見ましたがお客さんはブルジョアか怪しい山師のような白人ばかりでしたが、調理担当と清掃の職員は

みなさん黒人でしたが本当に楽しそうで良かった。

南アフリカでは黒人でも英語さえ出来ればいい仕事につけると息子がいていました。TAAA の本が幸せを運んでくれたのかもしれない。皆さんの移動図書館は本当に素晴らしい。出来れば若者に志をバトンタッチしていけたらと思いました。ありがとうございました。

菊川 穰 元ユネスコ（国連教育科学文化機関）南アフリカ事務所勤務

31年間に渡る、南アフリカの子どもたちのための様々な素晴らしい支援活動。野田さん、浅見さん、久我さん、そして、現地の平林さんや、これまで活動に関わってこられた皆様に対し、心より敬意を表します。ありがとうございました。

私は、自身がユネスコ（国連教育科学文化機関）の南アフリカ事務所に勤務していた1998年から2000年に、移動図書館活動に関わる調査等に関わらせて頂きました。思えば、すでに四半世紀前で TAAA の長い歴史の初期の頃だったのかと、五十肩で辛い日々の中、感慨深く振り返っています。赴任した当時、南ア

の大統領はマンデラさんだったのでから！

当時、野田さんは、「今後、資本主義はなくなりたいと思います。ただ、そのままでは問題があるから TAAA が必要だ。」と話されていました。今も、ふとした時に蘇るこの言葉は、TAAA の持つ深い思想、高邁かつ優しさに満ちた正義感、近年よく言われる団体としてのパーパスを表しているかと思います。活動を終了されることは無念ですが、気候変動、紛争、感染症による人類の危機が言われる今、このパーパスが若い世代に引き継がれていくと信じています。

楠原 彰

そうですか、三十一年ですか。本当にご苦労様でした。ぼくが反アパルトヘイト運動に関わって三十年ですから、野田さんはそれを超えられたのですね。熱い敬意を表します。ご苦労様でした。

ぼくはマンデラ登場以降南アから離れてしまいましたが、南アの人々のことを忘れたことはありません。ぼくは今脳梗塞の療養中で皆さまにちゃんとしたメッセージを送ることができませんが、南アフリカの人々を思う気持ちは TAAA の皆さまのお気持ちに重なっ

ていると思います。

イスラエル政府によるパレスチナ人に対する狂気のアパルトヘイト政策を、かつての南アの苛酷なアパルトヘイト政策と重ねながら、耐えがたい気持ちで見つめています。人間であるということは、どういことでしょうか。

TAAA の皆様が南アフリカに蒔かれた種が、人間の平等を生み出す原動力になっていくことを心より願っています。

長い間、ありがとうございました。

小宮山 明子

TAAA との出会いは、新聞で野田さんらの活動を知り、私から連絡をしたことがきっかけです。

その後、ご縁で一時期 TAAA の活動拠点である公文の教室がある建物に住んでいたことがあり、野田さんとはとても親しくさせていただきました。助成金の授与式があるので、与野の郵便局と一緒に行きませんかと野田さんに誘われたことがありました。私はほとんど助力していないのに、助成金目録が野田さんに手渡されるその瞬間の写真に、私もしっかり収まり、その様子が新聞の記事になったことを覚えております。

富山県に転居してからは、遠くから見守ることしかできなくて残念でした。当時一緒に活動した久我さんや、浅見さんや現地の平林さんが地道に活動を続けられているのを、TAAA の会報で見ると、頭が下がる思いでした。

あれから二十余年、TAAA の活動は英語の本の送付と図書館車だけに留まらず、多方面に広がりました。

野田さんや長きにわたって野田さんと活動を共になさった皆様、お疲れ様でした。皆様の奮闘や多くの方々からの寄付は、それを受け取った南アの子どもの大きな糧になったと信じております。

塩野谷 憲史

〈30年前、週刊誌でTAAAを知って〉

前回、本年限りで活動終了の報告のお知らせをいただいてから、今回、最後のご挨拶までいただけたとは思いませんでした。平成5年8月の週刊誌での野田様の活動を知り、独り暮らしをしていた横須賀から与野まで押しかけて旦那様とお会いしたことから始まりました。

私たちは丁度バブル崩壊直後で経済的にそれ程困っている時でもなかったですね。かわりにその頃は昨今のネット社会と違って、CD や本・車等、何でも自腹を切って買わなくてはいけない時代で、ネット社会より情報量も少なかったです。しばらくの間、TAAA

からルイボスティーを買うこともできました。その頃にマンデラ氏はノーベル平和賞受賞や大統領に就任していたのですね、あれから30年。最近ではネット上で在住や旅行したユーチューバー達から少しは街の様子も見ることが出来ます。まだまだ治安もよろしくないようですが、日本も終戦から30年後には、まだまだ少し伸びしろがあったように、いずれ天然、自然に、そしてなん10年後かそれ以上先にはだんだん豊かになっていると信じたいです。

アジア・アフリカと共に歩む会の皆様がこの31年間に現地の黒人さんたちに、本、サッカーボール、車、教育……とお膳立ては整ったと思います。平林さんたちと繋がって、貧困、無勉強、その他諸々の災いから段々に離れていってくれば、と思っています。

島 裕子 株式会社商船三井 理事

7年ほど前になりますでしょうか。貴会の南与野の作業場を訪問し、本が山積みとなっている作業場や、南アフリカでの活動動画を見せていただいたこと、その動画で見た本を手にした子どもたちの笑顔を懐かしく思い出しております。野田さんが、会の設立当時、当社の役員に突撃して支援を要請したというお話を伺った記憶があります。途上国支援に対する熱意に当社の当時の役員が動かされ、無償輸送の協力させていただくこととなったのだと思います。

31年間の活動を通じて、49万冊の本を届けられたということ、素晴らしいですね。スマホやタブレットで文字を読む時代ですが、本の手触りや、ページを読み進めていく喜びなど、本でなくては得られない感覚がきっとあるだろうと思います。これまでみなさんが送ってこられた本を多くの子どもたちがこれからも手に取り、読むことや学ぶことの喜びが引き継がれていくことでしょう。本から、さまざまな世界や考え方があることを知ることが、平和の原点となるような気がします。みなさんがコツコツと積み上げてこられた活動が、将来の平和の礎となることを願ってやみません。

服部 将之 国際協力機構 (JICA) 沖縄センター市民参加協力課

〈TAAA の活動に感謝と敬意を込めて〉

2015年の4月に JICA で働き始めた自分は井の中の蛙でした。というのもその直前までの足掛け7年間、タンザニア・ケニア・エチオピアで暮らし、アフリカを知ったつもりになっていたからです。TAAA が南アフリカで実施する草の根技術協力事業「学校を拠点とした有機農業促進のモデル地域作り」を担当する中で、自分の知らないアフリカを知るようになりました。

私が住んでいた3か国では、多くの方が野菜の育て方を知っていて、都市部でなければ誰でも家庭にちょっとした畑を持っています。それに比べ、南アフリカでは「農業を知る人が少ない」という事実を知った時の衝撃は忘れません。アパルトヘイトによって失われた南アの小規模農業を、少しずつ復興させようとしている、決して大きくない日本の NGO の強い意志を感じました。

前述のプロジェクトが終了する頃、後継事業として今度は地域の若者をターゲットにした事業の構想があることを教えていただきました。職がない若者の自立と食料自給率の向上を促したい、そのためにはどういった活動が必要なのか。これについて TAAA と JICA 双方で意見を出し合い、決まったプロジェクトの名前が「有機農業塾を拠点とした農村作り」でした。代々木上原の喫茶店で、久我さんと平林さんと話し合った時間を今でも覚えています。私が現地調査にうかがった際、農業塾 (MOATS) に通う地域の若者の声を聞き、事業の目標が一步步達成

されることを実感できたことも良い思い出です。

草の根技術協力事業において最も重要で難しいことは「自立発展」です。終了までに、現地の誰がどうやって活動を引き継ぐのかを協議しなければ、プロジェクト終了後に残るものがほぼありません。農業塾の事業では、州環境省という強い味方が引継ぎ、現在も責任を持って運営を続けていることを先日うかがいました。これは事業の内容が南アフリカ側で評価され、TAAA が組織として信頼されていた証であると思います。

TAAA が南アフリカに蒔いた「有機農業」の種が目を出し、草の根がしっかり張って、これから収穫に向かって季節が変わるところなのかも知れません。今回、貴会が解散されるということを知り、寂しい気持ちはありますが、心からの「お疲れさまでした」を申し上げます。ありがとうございました。



原山 浩司 (元群馬県公立小学校校長 元群馬県公立中学・高校教諭 (94~97年 ヨハネスブルグ日本人学校赴任))

〈国際社会における TAAA の軌跡〉

TAAA との最初の出会いは、久我代表から届いたメールでした。

「サッカーボール一つあれば、子どもが学校に通うモチベーションになる。協力してもらえないか」という内容のものでした。そこで、かつて勤務していた地域の学校より寄付をしていただき、その半年後には学校名の入ったサッカーボールが南アフリカの笑顔に満ち溢れ子どもたちに引き継がれました。送られてきた写真は、まさに世界が繋がっていることを物語り、大きな反響と感動を呼び、日本の子どもたちによりグローバルな視点で多くのことを考えられるきっかけを与えてくれました。

後日、アフリカの教育施設を訪問する予定であった私は南アフリカまで足を延ばし、平林さんの案内でその光景を直接体験するとともに、さらに TAAA が教材・教具を送ることで貧困地域の学校を支えている様子を見学させてもらいました。私が最も深く印象に残っていることは、元はコンテナだった図書室（館）で子どもたち自らが決めたルールに従い図書活動に取り組んでいる姿でした。今や、いつでも必要な情報は

手に入る時代となった一方で、ネットワークの整備が行き届いていなかったり、IT 機器の購入が困難だったりする地域が多くあります。学習意欲が高い子どもたち、そして学校や地域を支えるべく TAAA は着実に図書文化を根付かせ、子どもたちの学習機会や将来の選択の幅を広げた功績は計り知れません。現地の子どもたち、そして職員の活動する姿を見た時、私はいつかこの子どもたちの図書への情熱が日本の図書文化と融合できたらと願わずにはいませんでした。

TAAA のこれまでの取組は、海外の子どもたちだけでなく、日本の子どもたちの心の中にも大きく刻まれ、国際情勢に関心をもったり、人やものの価値をいろいろな視点から考えるようになっていたりするなど視野が広がりました。世界が一枚岩になっていかなければならない今、国際社会が求められているものは何か、裾野を広げる活動に汗を流した TAAA の取組がヒントを与えているのではないのでしょうか。

私は TAAA と出会えたことに心より感謝しています。そしてこれからも私にできることを私なりのやり方で、TAAA の軌跡を引き継いでいくつもりです。

廣内 かおり 特定非営利活動法人アフリカ日本協議会 事務局長

私が初めて TAAA の報告会に行ったのは1999年だったと思います。当時、NGO に本格的に関わるようになってからまだ日が浅く、アフリカにも行ったことがない頃でした。報告会では、本を送るという柱の活動に加えて、子どもたちの暮らしや南アフリカ社会についてなど、話題は多岐に渡りました。その名のとおり現地の人々と共に、現地人たちのペースで活動するというのはいくつかのことなのかと思ったことを覚えています。

TAAA が設立された2年後に、いま、私が所属するアフリカ日本協議会は設立されました。設立当初(1994年設立)から TAAA の皆さまにはさまざまなお協力をいただけてきました。会報「アフリカ NOW」には、1995年『南アの12の学校を訪ねて』

(野田千香子さん)、1996年『NGO 活動報告「アジア・アフリカと共に歩む会(TAAA)」』(久我祐子さん)、2013年『学校を拠点とした地域菜園活動—南アフリカ・クワズールーナタール州での実践』(平林薫さん)、『地方発信の農業が若者の潜在能力を生かす—南アフリカ・ヒバディーンにおける有機菜園活動の報告』(平林薫さん)など、活動の様子を執筆していただきました。

1990年代に設立された団体が活動を終えるのは寂しくもありますが、最後まで現地の活動をしっかりと見届け、目的を全うして31年の活動を終えられることに、心より尊敬をいたします。南アフリカの図書の輪が、現地の皆様のご活躍で今後もどんどん広がっていくことを心より願っています。

吉田 昌夫 (元「アフリカ日本協議会」代表 元中部大学および 日本福祉大学教授 元アジア経済研究所員)

〈1992年より2023年までアフリカの学校図書館を中心とした支援を続けた
NGO「アジア・アフリカと共に歩む会 (TAAA)」へのメッセージ〉

ネルソン・マンデラ氏は南アフリカ共和国で40年間、政府による人種差別政策（アパルトヘイト）撤廃を要求する政党（ANC）のリーダーとして活動し、そのために反政府活動の理由で投獄され、1990年に解放された直後、全世界をめぐる ANC 遊説のために日本にも立ち寄ったとき、彼のスピーチは日本の市民に深い感銘を与えました。マンデラ氏が特にその時強調していたのが、人種隔離政策により、アフリカ人は他の人種（とくに白人）とは別の教育システムに入れられ、大変貧弱な教育しか与えられていないということを説明され、黒人教育を支援してほしいといわれたことが、当時マンデラ氏歓迎行事の事務の仕事についていた私の心に強く残っています。

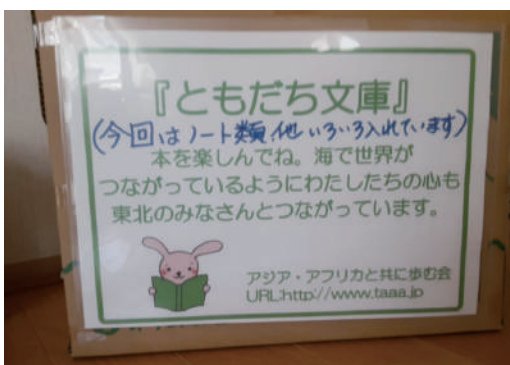
その後、マンデラ氏の属する ANC の東京支部の仕事を手伝っていた野田千香子さんや久我祐子さんたちが、アパルトヘイト解体後の南アフリカの教育システムの支援に立ち上がり、当時の日本の NGO としてできることは何かと考えた末、英語の本や移動図書館車という車両を日本から送り、そこに近くに住む青少年男女が来て、中に積まれた英語の本を読むという

「移動図書館」の考えを実現させたことを知って、私は実現可能なことをまずやるという TAAA の働きを支持したいと思い、今日まで、その働きを会のニューズレターなどでフォローし、感銘しながら見守ってきました。TAAA は活動が進むにつれ、現地の利用者の希望が、固定した場所を持つ図書館に青少年男女が集まる方式に望みが高いことを汲みとって、固定した場所を持つ学校図書館などに対する活動に重点をシフトしていったことを聞いております。

英語の本を集めること、それを梱包し、無償の海上輸送を申し出てくれた商船三井株式会社にそれを届け、現地では学校図書館活動を支援し、後には、現地に学校菜園やコミュニティ菜園をつくり、その支援にあたるなど、現地社会のニーズに応えた活動を30年もの長いあいだ、継続しておこなってきた TAAA の役員や会員の皆さんの努力を称賛します。中途にはコロナの蔓延など、不可抗力の困難に遭うことがあったと思いますが、それをも乗り切った TAAA の底力には、本当に感心しています。いろいろなご苦勞をねぎらいたいと思います。

●東日本大震災の被災者支援の際に現地パートナーとしてお世話になり、現在も精力的に支援活動をされている佐々木智恵さんからもメッセージをいただきました。

佐々木 智恵



味で今も心の支えが必要なんだと、私自身も数多くの課題を抱えながら、支援を出来る時には真心の子供支援、真心の笑顔の対話活動支援をさせて頂いております。TAAA の方々が色々なカタチで支えてくださったおかげで心に寄り添う人の関わり方の大切さを、被災地に足を運んで下さった事からもわかり、私なりに体調をみながら継続させて頂いております。

東日本大震災の時には東松島市をはじめ、石巻、仙台方面と、多くの被災した方々へ支援をし、TAAA 様より送られてきた物資を喜んで頂き渡せる事ができました。多くの方々へのご支援のお手伝いをさせて頂いたおかげで、今は少しずつ、落ちつきを取り戻しつつあります。

東日本大震災以降、亡くなられた方や色々なカタチで病気を抱える方も多く、色々な意



～ 共に歩んだ南アの皆さんからのメッセージ ～

デイブ・ベントレイ MEI/Ekufundzeni 会長

MEI（現在は「読む場所」という意味の Ekufundzeni）は、1992年に始まりました。私は幸運にも恵まれた家庭・学校環境で育ち、キリスト教的信念からも、恵まれない人たちを助けるために何かしなくてはという気持ちを持っていました。

私と私の妻は、近くのタウンシップであるデベトンにある学校の校長の一人と友人としてつきあっていたので、彼に連れられてタウンシップの学校めぐりをしました。そんな1993年2月に、ある友人から、恵まれない学校に本を配布するのを助けてくれる人を探しているという野田千香子さんからの手紙を手渡されました。私は、学校が本を必要としていることを知っていたので、返事を送りました。次にどう動くべきかわからないまま。

すると大きな日本郵便の郵袋で本が到着し始め、MEIの活動がはじまったのです。私たちは集めた本を種分けして学校に配ったのですが、図書室が機能していなかったり、教室不足で教室に変えられてしまったりで、本の収納が難しいことが明らかになり、1994年には、野田さんに気楽に、直ぐの対応など期待しないで、本を有効活用するためには移動図書館車があるといいようなことを言っていました。彼女は直ぐ反応してくれて、日本には移動図書館車がかなりあるから、中古のものを手に入れるように試みると言ってくれました。そして1995年には TAAA が送った最初の移動図書館車（青い三菱車）が到着し、その後何年も活躍しました。当時幸運にもネルソンマンデラの訪問を受けました。



移動図書館車を訪問したマンデラ氏

ば起こりえなかったことです。

そんなわけで、1993年以来、南アフリカの恵まれない学生たちのために行って下さった驚くべき、独創的地固め仕事に係わって下さった TAAA の方々に大きな感謝を送ります。あなた方は彼らの相当数の人生に直接影響を及ぼし、大きな、持続的変化をもたらしました。MEIの移動図書館車はまだ毎日操業されているし、その他の車も同様です。

しかしさらに重要なのは、若いころに本に接することができた結果、多くの人々の人生が永久により豊かになったということです。

TAAA による手の差し伸べで始まったささやかな活動が、恵まれない南アの学生を支える長い業績へと繋がって行ったのです。

- 多くの移動図書館車が、日本から南アに輸送されました。この最初の一台がうまくいっていなかったら、これは実現できなかったことです。何十万人もの南アの学生にもたらされた恩恵です。

- デベトンとエトワトワにある30校以上の学校が、過去17年にわたって、10万人以上の生徒たちに読書へのきっかけを作ったこととなります。

- MEI 移動図書館車の結果として、「読み聞かせゴゴプログラム」が、四つの学校で開始されました。これは人種横断的進取の試みで、そこでは、年配の白人女性が若い黒人学生と読書を通して繋がったのです。私たちは最終学年時に彼らの何人かにインタビューしたところ、このプログラムが自分たちにとってどれほど意義深いものだったかを心温か気に語ってくれました。彼らは今成績もトップになっています。

これらすべては、TAAA からの最初の手紙のおかげで実現できたことです。あの手紙のやり取りと最初の移動図書館車の輸送がなければ

ノズィズウェ・ザミサ



(クワズールー・ナタール州教育省 元ムタルメノ
トウートン学区長 元ドゥエシューラ学区長)

これは TAAA がクワズールー・ナタール州ウグ郡の学校のためにやってくれたことに感謝の意を表すものです。

菜園活動、図書、そしてコンピューター教育は、この学区ではシボンギーレ（南アフリカ人が平林薫さんに付けたズールー名）によって導入されました。ノンシャンシャ（久我祐子さん）もこの学校を頻りに訪問して、導入した活動の進展状況をモニターしてくださいました。

もし私が「この学校に差し出された支援がとてつもないもので、私たちの学校に絶大な結果をもたらした」ということを口にしなければ、私は自分の義務不履行を恥じることになってしまいます。TAAA プロジェクトの主な目標は、理解して読めるようになることでしたので、生徒たちの英語の読解力向上を助け、ウグ郡での高い合格率（高校卒業試験）に寄与しました。

すべての教科は英語を介して教えられ、試験も英語で受けます。移動図書館車やコンテナ図書室が導入される前は、この生徒たちはたとえ答えが分かっていたとしても、質問を理解するのが困難で、結果的に設問に対する答えがちぐはぐになってしまったりしました。

TAAA プロジェクトによって小学校で築かれた土台は、読み・書きの初期段階で確固たるものになりました。高校でのマトリック（高校卒業試験）成績にも改善が見られ、英語の合格率が100%になった学校もあり、他の教科の改善にも繋がりました。TAAA のプロジェクトがなかったら、こんなことはとても不可能でした。

菜園活動の技術にも進展が見られ、菜園技術を習得した者は、コミュニティ内で自分の作物を売って稼いでいます。今では学校に菜園があり、学校栄養補給プログラムによる給食の食材になり生徒たちに食されています。

TAAA プログラムの対象校は、ラップトップを持っており、教員と生徒がその使い方を教えてもらい、今ではコンピューター有識者になっています。

TAAA とすべてのスポンサーに感謝します。この友情と支援関係が続き、そこに灯る明かりが輝き続けますように。神の恵みが注がれ続けますように。本当にありがとうございました。

ズウェ・ンベレ (クワズールー・ナタール州教育省 図書情報部門 (ELITS) ウグ郡長)

〈TAAA -Japan へ 教育従事者同志への感謝状〉

ウグ郡にある5つの学区の学校の代わりに、感謝と淋しい複雑な気持ちを抱えながら、謝辞を申し上げます。

私が2010年に平林薫さんの音頭の下に TAAA との活動を始めて以来、TAAA の図書プロジェクトにより改善された学校は100校以上になると理解しております。TAAA はこれらの学校で、移動図書館車にとどまらず、菜園作り、スポーツ、読書にいたる分野でプロジェクトを運営してきました。TAAA との長きにわたる実り多い出逢いは、私たちの学校に大きな気概を生みだしてくれました。

多くの学校には読書用の本が殆どなく、図書に対する考えも立ち遅れていました。そのようななかで、学校図書活動の概念を導入してくれたのが TAAA でした。

プロジェクト導入校の図書司書教諭たちは、読書プログラム、実務、図書室運営について、スキルの高い TAAA 指導員からしっかり訓練されました。



モンドリ・チリザ（TAAA 現地スタッフ 図書指導員）

ムタルメのモンドリ・チリザです。TAAA で働いています。まず、この機会にシボンギレ（平林薫さん）に TAAA の活動に参加させていただいたことに感謝したいと思います。私は自分の学校で図書委員会生徒として活動をしていた時から TAAA のことを知っていました。読書が大好きで仲間と校内に図書室を作るためにルツーリー高校で頑張っていた時のことです。私は 2015 年に TAAA に参加し、移動図書館車で学校回りをしながら、さらに図書館活動についての知識と情報を獲得していきました。日本人と一緒に仕事することに興味をもち、とても楽しんできました。TAAA の図書活動を通して多くを学び、この活動の一端を担わせていただいたことに TAAA に大変感謝しています。



私は様々な環境下、都市部、農村部、特殊な事情下の学校を訪問するのを楽しんできました。各学校の生徒・教員たちからもたくさんのことを学びました。農村部の学校は町から離れていて、見放されていると感じがちでしたが、TAAA が入ってからは、図書室を持ってとても幸せそうでした。様々な本を読み、コンピューター利用の基礎技術を経験できて興奮していたようです。

条件の違うそれぞれの学校はいろいろ違った課題を抱えています。情報交換やアドバイスがあれば、どんな学校も問題を解決できることに気づきました。私自身、そういったスキルと経験をたくさん獲得させていただきました。私個人、私たちの学校、私たちの居住区を支援して下さったことに対して、日本のみなさんに感謝します。私に成長する機会を提供して下さった TAAA に感謝します。私たちの学校と私たちのコミュニティはまだみなさんの支援を必要としています。TAAA の事情もお察しいたします。今後とも連絡し合っていけたらと願っています。日本のみなさんありがとうございました。私たちの学校とコミュニティは TAAA のみなさんのことをいつまでも想っています。

ンタンデニ・ザマ（クワズルー・ナタール州環境省）

〈NPO 法人 TAAA と南アで一緒に働いて〉

私はウムズンベ区のムタルメ居住区出身で、1999年から2006年までの8年間小学校で教えておりましたが、2006年に州環境省に移り、2008年まで SEEP というクワズルー・ナタール州立学校環境教育プログラム、その後若者のための環境研修プログラムなどを担当していました。SEEP を運営していた時、同じく持続可能な発展、教育、生活、そして未来の改善を目指すという趣旨で、TAAA が同じ様な学校を対象に学校菜園事業を実施していました。その事業が終了した2015年、私は年齢、性別、学歴、人種を問わない地域の誰もが参加できる環境教育センターの設立をシボンギレ（平林薫）に持ちかけました。日本からも久我代表が参加し、TAAA が去った後も続いていくようなプロジェクトとして、JICA 草の根事業として申請することになり、有難いことに承認されました。これにより私は州環境省と TAAA チームを接着する役割を担いました。MOATS（ムタルメ有機農業塾）と名付けたプロジェクトを通してメンターシップ付きの農業従事者育成が導入されたのです。今日、MOATS ではリクルートされた農業従事者が訓練を受け、力をつけていっています。TAAA との出逢いは大いなる恵みでした。



ムタルメ居住区の今は、TAAA プロジェクトの導入なしにはあり得なかった姿です。今日、MOATS は、コミュニティに次のような支援をもたらしています：有機農業、図書室、有機農法による指導、若者へ希望を与えていること、生徒たちの学究面での応援。

TAAA はクワズルー・ナタール州の南岸地域を心優しく応援してくれました。学校を単位としての働きかけは、教育の質を改善し、教員たちが働きやすくなるのを応援しました。

TAAA と JICA との共同作業はもっと続けられたらありがたいのと思いますが、残念ながらそうはいかなさそうです。TAAA のスタッフも退職後の生活を家族と楽しんで下さい。あなた方の貢献は絶大で、私とボングムーサや他の農業従事者にとどまらず、みなさんの貢献の恩恵に預かったムタルメのすべての人々に今でも、またこれからも評価・感謝され続けることでしょう。

スフィソ・グンビ (ドウエシューラ学区フランクランド小学校校長)

〈みなさんのアフリカへの心温まる働きかけに対する大感謝〉

兄弟・姉妹のみなさまへ

我々、フランクランド学校全体、学校評議会 (S.G.B.)、学校運営委員会 (S.M.T.) そして全スタッフはここにみなさんが提供して下さいました素晴らしい支援に誠意を込めて感謝を表したいと思います。

フランクランド小学校は普通の視点で見ただけでは気づけないような困難をかかえる奥深い農村部の学校です。しかし驚いたことに、神は TAAA の娘シボンギーレ平林さんをみなさんのアフリカへの絶大なる支援行動を通して私たちを助け出すようにと促したのです。それ以来平林さんとモンドリ・チリザさんは私たちの学校に変化をもたらそうと渾身の働きをしてくれました。彼と彼女は私たちの生徒に本と読書に対する愛を培うのにあの手この手を使ってくれました。コンピューター技術教育にも私たちを触れさせてくれました。実際のところ、彼・彼女は私たちのスタッフの一部となって、金曜日には、授業までこなしてくれました。彼と彼女は模範的で、遅刻をしたこともありませんでした。生徒とも教師とも良好な関係を築いてくれました。2022年に生徒たち、特に7年生が立派に修得した技能は、伝達力、読む力とコンピューターの基礎技術でした。



私たちは次の出来事の際に味わった興奮の瞬間を忘れることはできません。

1. まずはシボンギーレが、コンテナ図書室の寄贈のニュースを伝えてくれたとき
2. 最初に本が届いたとき
3. コンテナの配達

フランクランド小学校に指しのべて下さった支援に対し、日本のみなさんに神のご加護がありますように。

カーム・ギダ (クワズルー・ナタール州ウムズンベ農業事務所 農業アドバイザー)

親愛なる同僚・同志のみなさん

地域で農業活動を支えるために、あなた方と協働させて頂いたことへのこの感謝の一言をお受け取り下さい。ムタルメの老若の農業従事者に代わって、一緒に活動を開始して以来ずっと続いたご支援に、心からの感謝をお伝えしたいと思います。

TAAA は次のような様々な活動で農業従事者を支えてきてくれました。

1. 菜園の設置

- 学校菜園：農具と苗・種を供給することで、若い子どもたちに食糧生産の文化を根付かせた。
- 家庭菜園：苗・種を供給することでモチベーションを高め、家庭の食糧保障を促進。
- コミュニティ菜園：農具、菜園内装（フェンス用製品や灌漑設備）と苗・種の供給によって地域の食糧保障を促進。

2. 作物や野菜生産における訓練やワークショップの提供

3. 市場との連携、生産物輸送手段確保への協力

4. 自然堆肥を使うことの重要性を強調する有機農法の促進

5. ボランティア雇用を通して若者への労働機会の提供

6. 指導力や組織力のようなスキルの養成

7. ムタルメ有機農業塾（MOATS）の発展。MOATS は、農業に従事する地元住民への研修を実施する際に大変効果的。

農業生産を通して都市から遠く離れた農村部と貧困世帯の生活水準の底上げの試みにおいて、TAAA のような組織と一緒に仕事をする機会に恵まれて光栄でした。あなた方の献身と惜しみない働きは真に一つの金字塔となりました。

みなさんには、次のお仕事に幸運あれと願っております。



ジェニファー・ンバンボ (トゥートン学区ベギジズウェ・ジュニア小学校 校長)

ウグ郡トゥートン学区のベギジズエ小学校の校長、教員、そして学校運営評議会は、2つの大きな教室（その一つは集会ホール、もう一つは図書室）建設のためのご支援をいただいたことに心からの感謝の意を記録に残したいと思います。

生徒たちは地域で大事な位置をしめており、その地域の識字レベルを上げるための設備を持つことは意義深いことです。私たちの学校に提供して下さった本のお陰で、読み書きの力は大分伸びました。

寛大なご支援の貢献は大きく、あなた方の団体は高いレベルに達しました。援助を必要としているところへ寄り添ってくださることは大歓迎です。

私たちはあなた方へ心から感謝いたします。神の恵みがあなた方に注がれ続けますように。



ブイシーウェ・ザマ (トゥートン学区バンギビーゾ小学校 教師および司書教師)

バンギビーゾ小学校と学校制度の全共同体を代表し、TAAA がバンギビーゾ小のことを考えに入れプログラム対象校に含めてくれたことに対し、先ずは神に最大の感謝を捧げたいと思います。

TAAA は最初に“私たち”バンギビーゾ小に菜園活動を紹介してくれました。TAAA は有機食物と儉約の重要性を教えてくださいました。今日バンギビーゾ小は野菜を育てており、多くの生徒たちは自分の菜園を学校でも家でも持っています。私たちの菜園はめぐまれない生徒たちに野菜を配給しています。TAAA の他のメンバーも遠く日本からわざわざやってきて菜園を訪れ手伝ってくれました。



次に TAAA は生徒たちが読書に興味を持つように図書活動を導入してくれました。図書活動は、毎週木曜日に本を載せたバスがやってきて、そこで本を借りていくことから始まり、やがてバンギビーゾ小に興味深い本が詰まった美しいコンテナ図書室を寄贈してくれました。その後ラップトップとプリンターも寄贈していただき、生徒たちに重宝がられています。生徒たちは各自で調べものや宿題をやるのに使っています。TAAA のお蔭です。

TAAA とバンギビーゾ小は開始時から現在に至るまで平林さん（シボンギーレ）の指示・指導のもとで驚くべき旅をしてきました。TAAA が終了するという知らせにも拘わらず、何ごとも当校と TAAA を分かつことはないでしょう。

テンベカ・ンベレ （ドゥエシューラ学区ウマルシ小学校 教師・司書教師）

ウマルシ小を代表して、TAAA とメンターに対し、当校への気前のよいご寄付に心からの感謝の意を表したいと思います。当校への図書室備品、パソコンおよびプリンターのご寄贈に感謝いたします。現代では必須であるパソコン技術教育を生徒たちに提供するのに助かります。

この援助は、私たちの最終目的である彼・彼女らの学びを探索する力を強化すことを通して、恵まれない子ども達の未来を変える助けとなるでしょう。私たちはシボンギーレ（平林薫）とモンドリという2人のメンターにも大いに感謝しています。彼らは評価されるべき大きな力です。



ピリシーウェ・クマロ （ムタルメ学区イナラ小学校 教師・司書教師）

イナラ小学校は司書教師および教職員を含め、あなた方の寄付、やさしい対応、当校の教職員の教える力量と生徒たちの学習力向上への影響力に対し、深く感謝していることをお伝えします。

この間成功した行事・できごとの主なものを一緒に振り返ると、次のようになります。

- 2009年 司書教師研修会に参加
- 2010年 本到着
- 2013年 司書教師研修会に参加
- 2013年 学校移動図書館を訪問
- 2013年 本箱が寄贈
- 2014年 さらに本到着
- 2017年 パソコントレーニング
- 2018年～2019年 ラップトップとプリンター、低学年用椅子、インク、デジタル器具の寄贈
- 招待されたプログラムに参加
- 他学区の司書教師研修会における講師を TAAA から依頼され引き受ける。



司書研修会で講師を務めるクマロ先生

私たちが受け取った上記の寄贈の写真を証拠として添付しますのでご覧下さい。今後も連絡を頂けると嬉しいです。

ドウミサニ・ンギディ (JICA 草の根事業元支援対象者 現在 MOATS) 内の農業従事者・指導者 MOATS 周辺住民)

ムタルメ、コロコロ地区住民のギディです。この機会に、私個人と私たちのコミュニティに差し伸べて下さった支援に対して TAAA と JICA そしてその他のすべての日本のみなさんに感謝します。私は学校沿いの道路の建設工事に従事していたとき、帰りに自分の畑で作業をしていましたが、有機農法を教え広めるの手伝っている日本人がいるということを知りました。仕事帰りに私がいつも畑仕事を知っているコミュニティのメンバーが声をかけてきてくれたのです。2017年に10人の協働組合として、ボランティア菜園を始めました。シボンギーレ（平林薫）は、菜園を開始するのをうまく支援してくれました。以前はダムを掘って使っていたのですが、いろいろ問題が起こり、水がない状態でした。しかし、ありがたいことにシボンギーレが水タンクを持ってきてくれたのです。このグループはボランティアとして働いていましたが、続けられなくなる様々な事情を抱えるメンバーも出てきました。収入がないと暮らしていけない者もいて、とうとう私一人になってしまいました。でも TAAA としてシボンギーレが応援してくれていたのです。私はひとりぼっちではありませんでした。TAAA は、いつも私にやる気をおこさせてくれました。

私は自分の畑で取れた野菜を近隣の家に売り歩いてちょっとした収入を得るようになりました。シボンギーレと彼女のチームは、MOATS（ムタルメ有機農業塾）で有機農法についてさらに詳しく教授してくれるようになり、有機農法技能獲得資格証まで発行してくれたのです。そして、シボンギーレは私の経験を生かして有機農法の推進員になるように頼んでくれました。長い間ボランティアでやってきたことが、実ったということです。私はここ MOATS で働き、学校の中で一緒に働くママさんたちを何人かリクルートしました。ママさんたちと一緒に一生懸命働いて、砂地に肥料も加えて畑を作りました。途中目を患って入院しましたが、も



どってきてまた元気に再起動しました。私は自分を MOATS の柱だと自負しています。JICA プロジェクト進行中は、TAAA がいろいろ提供してくれましたが、いまや自分たちで自立しなければなりません。私は常に回りの友人・知人が元気で、安全に暮らせていることを願っています。これからもコミュニティのために働き、MOATS が模範例になるように、MOATS の敷地を常に野菜で緑いっぱいにしていきます。私たちのコミュニティを支援して下さった TAAA と日本の皆さんに大変感謝しています。神の恵みがありますように。

Siyabonga ! ありがとうございました。



図書室で YOUTH DAY について調べ発表するビューラ小学校の生徒たち

自由南アフリカの声 第82号

2024年1月5日発行

発行 特定非営利活動法人 アジア・アフリカと共に歩む会 (TAAA)

編集発行人 久我祐子

電話 090-9957-2256

〒330-0855

埼玉県さいたま市大宮区上小町1327-208



TAAA のHP

E-mail info@taaa.jp

URL <http://www.taaa.jp/>